

Abhisamayamañjarī の構成とその特徴

前 田 真 悠 里

1. はじめに¹⁾

Abhisamayamañjarī は Vajravārāhī の成就法が記された、サンヴァラ系の儀礼書である。インド後期密教において Hevajra や Saṃvara の配偶尊として知られている²⁾、この Vajravārāhī の姿形は多種多様である。例えば、①一面・二臂・赤色、②一面・四臂・赤色、③一面・二臂・黄色か青といった姿をとる³⁾。さらに Vajravārāhī は、“Vajraghoṇā” や “Vajrayogini” といった異名を持つ女性尊格である。

以上のような Vajravārāhī の成就法を記した当文献は、著者や成立時期について未だ明らかになっておらず、内容や成立過程の解明にあたり、関連文献と比較することで当文献の特徴を見出す必要がある。本稿においては、当文献と関連文献の内容を比較する前提として、構成について比較し、当文献における構成の特徴を明らかにしたい。この比較結果は当文献の内容を解明すること、および、サンヴァラ系密教における当文献の成立背景を模索するための基礎資料となるだろう。

2. *Abhisamayamañjarī* と *Cakrasaṃvarābhisamaya*

2.1 *Abhisamayamañjarī* について

当文献の一次資料にはサンスクリット写本が7本とチベット訳が現存している。サンスクリットの写本には *Abhisamayamañjarī* が単独で収録されているものと、*Guhyasamayāsāghanamālā* (以下 GSS) の5番として収録されているものの2種類がある。GSS は Vajravārāhī に関わるテキストのみを

集めた成就法集であり、写本によって数は異なるものの44~46のテキストが収録されている(塚本他1989:285)。当文献の校訂テキストとしてはS. RINPOCHEとV. DWIVEDIによるものがあるが、この版本には誤記・誤読も多く、また、校訂の際に参照されていない写本もある。この他、ENGLISH(2002)において、部分的な校訂テキストと英訳が掲載されている。

また、前述のとおり当文献の著者は確定されておらず、写本によって著者として記されている名前が異なっている。サンスクリット写本の場合はŚāntarakṣitaあるいはŚākyarakṣitaの名前が記されており、チベット訳の場合はŚubhākaraguptaの名前が記されている(塚本他1989:279)。著者に関して現時点で明らかなことは、本文の中でLūyīpādaとAbhayākaraguptaについての言及があることから、この2人よりも後の時代の人物によって書かれたということである。さらに本文には、著者の師匠がAbhayākaraguptaであると読み取れる記述⁴⁾がある。この記述から当文献は、塚本他(1989:279)においてAbhayākaraguptaの弟子として名前が確認できるŚubhākaraguptaに帰せられる可能性が高いと考えられる。そして成立時期については、本文中に引用されているVajrāvalīの成立年代とGSSの写本の書写年代から、12世紀前半から14世紀までには成立していたと推定される⁵⁾。

2.2 Lūyīpāda 著 Cakrasaṃvarābhisamaya

Cakrasaṃvarābhisamaya(以下CSA)はサンヴァラ系の諸流派のなかで、最初期の流派とされるLūyīpāda流の根本典籍と言われている儀礼書である。Lūyīpādaに帰せられるこのCSAには、桜井(1998)による校訂テキストがある他、桜井(1997b)による前半部分の翻訳がある。CSAはサンヴァラ系の文献のなかでも、その註釈書も含めて研究が進んでいるといえる。したがって、CSAに関連した多数の研究論文が執筆されているため、先行研究から得られる情報が多い。以上のように参考文献が多い点と、Abhisamayamañjariの中でLūyīpādaの教えに関して言及があること、さらに、構成と内容に類似点が多いことから、本稿ではCSAを比較対象とする。

類似点が多いとはいえ、AbhisamayamañjariとCSAには相違点もあるこ

とを留意しておくべきだろう。その相違点とは、CSAが62尊マンダラの成就法である一方で、*Abhisamayamañjarī*は37尊マンダラの成就法である点である。37尊マンダラとは、CSAの62尊マンダラを構成する尊格のうち、25尊の男性尊格は描かれず、37尊の女性尊格のみで構成されているマンダラのことである。男性尊格が描かれない*Abhisamayamañjarī*の成就法では、男性尊格と対応する教理なども示されていない。ただし、マンダラの構造については共通しており、主尊を中心に大楽輪→心輪→語輪→身輪→三昧耶輪の順に外側に広がっていく同心円構造となっている。

3. *Abhisamayamañjarī* の構成

具体的な比較に入る前に、まずは当文献の構成について概要を述べる。当文献は、以下に示すように大きく2つの部分から成り立っている。

- ・37尊マンダラから成る成就法部分（本文の約2/3）
 - 1 帰敬偈→2 準備→3 マンダラの観想→4 終結部
- ・付論部分（本文の約1/3）
 - 尊格としての過ごし方・諸供養・ホーマ儀礼・略儀礼・別バージョンの成就法・廻向偈など

上記のうち、主として前半部分の構成と内容がCSAと類似している。後半の付論部分はCSAと類似する部分は少ないものの、本稿5で後述するとおりCSAと関係の深い文献と類似する箇所がいくつかみられる。この付論部分には、他の聖典に説かれる7種類のVajravārāhiの成就法が、それぞれマントラや観想法を含めて例示されている。ただし、これらの成就法について、聖典の出典は明示されていない。Vajravārāhiの姿形は当文献全体で計11パターン確認できる。このように複数の成就法が説かれていることに関して、[5.7.6 半跏座のVajravārāhi]に挿入された文言がある。それによれば、当文献で提示されている成就法の中から、どの成就法を選んでも「これらの

次第の中で、1つの次第を受け入れたならば、信心と慈悲をもち、とらわれることなく誓戒を実行し、疑うことなく (nirvicikitsā) [Vajravārāhiを] 観想するものは必ず成就を得る⁶⁾と *Abhisamayamañjari* の著者は語っている。以上のように『現観 (Abhisamaya) の花房 (mañjari)』という著作名のとおり⁷⁾、数種類の成就法マニュアルが紹介されている点は当文献の特徴の1つである。

4. 構成の類似点・相違点

以下に *Abhisamayamañjari* と CSA の構成について比較し、その類似点と相違点をいくつか挙げる。

4.1 蘊界処の浄化の順序

[2.2 蘊界処の浄化] 部分と、CSA [2] の部分の比較である。当該箇所は Lūyīpāda が CSA の中で “skandhadhātvāyataneṣu devatāvisuddhiḥ” (蘊界処に尊格を [布置することによる] 浄化) と呼んでいる部分 (桜井 1998: (3), [2]) である。サンヴァラ系密教には「蘊界処」を順次、五仏・四仏母・金剛女・菩薩に配当する解釈がある (田中 2010: 367)。ここでの「蘊界処」の界 (dhātu) は、十八界ではなく地水火風の四大として解釈される。行者自身の蘊界処に尊格を配当していくことで、行者自身を浄化していくのである。この次第で蘊界処に配置される尊格はマンダラに描かれない。また、*Abhisamayamañjari* のマンダラには男性尊格は配置されないが、この浄化の次第では男性尊格も蘊界処に配置される。浄化の順番はテキストによって異なっているが⁸⁾、*Abhisamayamañjari* と CSA ではともに、蘊→処→界という順番で行われている。

四

4.2 「空性の観想」と「結界」の順序

[2.7.1 智慧資糧の積集]、[2.7.2 空性の修習]、[3.1.2 結界] と CSA [3]、[5]、[6] (b)、[7] (a)、部分の比較である。「空性の観想」とはすべての

ものが空であると観想する次第で、「結界」とはマンダラの守護のために金剛網などの観想をする次第である。この2つの次第の順番には、2文献に違いがある。Abhisamayamañjarīは先に空性の観想、その後に結界という過程をとる。一方でCSAは、先に結界、その後に空性の観想を行う。この2文献以外で、それぞれの過程をとる文献を、桜井（2011: 7）、及び、杉木（1997: 60, 63, 65, 67）を参照して以下に挙げる。

1. 先に「結界」、その後に「空性の観想」を行う過程をとる文献
 Guhyasamāja 流儀の成就法⁹⁾
 Lūyīpāda 著 *Cakrasaṃvarābhisamaya* [Toh. 1427: Ota. 2144]
 Dārikapāda 著 *Śricakrasaṃvarasādhanatattvasaṃgraha* [Toh. 1429: Ota. 2145]
 Ghaṇṭāpāda 著 *Śrī-Bhagavaccakrasaṃvarasādhana-Ratnacintāmaṇi-nāma* [Toh. 1437: Ota. 2154]
2. 先に「空性の観想」、その後に「結界」を行う過程をとる文献
 Guhyasamāja 流儀の成就法
 Kṛṣṇācārya 著 *Śricakrasaṃvarasādhana* [Toh. 1445: Ota. 2162]
 Kambala 著 *Bhagavacchricakrasaṃvarasādhana-Ratnacūḍāmaṇi-nāma* [Toh. 1143: Ota. 2160]
 著者不明 *Abhisamayamañjarī* [Toh. 1582: Ota. 2294]

上記のうち、Guhyasamāja 流儀の成就法以外はすべてサンヴァラ系の文献であり、その著者はサンヴァラ系の諸流派を形成した人物たちである。Lūyīpāda, Dārikapāda, Ghaṇṭāpāda, Kṛṣṇācārya, Kambala という人物たちにより、サンヴァラ系の諸流派は発展していった（杉木 1997: 59）¹⁰⁾。ただし、ここに挙げた人物による文献の全てが、この分類に分けることができるとは言えず、ここでは、先行研究からこの分類で分けられると判断した文献を、例示しているに過ぎない。

Abhisamayamañjarī [3.2.2 補記] において「空性の観想」と「結界」の

順序の違いに関して、著者の見解が示されている。それは以下に示すとおりである。

[3.2.2] yat tu **Lūyīpādābhisamaye** rakṣāvajrapaṅjarāder anantaraṃ śūnyatābhāvanoktā tad adhimātraprajñādhikārāt | tasya śūnyataiva paramā* rakṣeti | sarvajanasaṃgrahaṇaiḥ punar atra śūnyatābhāvanānantaraṃ rakṣāpaṅjarādikam uktam, bahuṣu cābhisamayeṣv iyam evānupūrvī dṛśyata* iti | (Sed: 8)

• paramā] em.; parā K, B, ENGLISH; param Sed

• dṛśyata] Sed; dṛśyeta ENGLISH

しかし、以上のことは¹¹⁾、ルーイーパーダのアビサマヤでは、守護のための金剛網などの直後に空性の観想が説かれており、それは、優れた智慧を有している人に「実践の」資格があるからである。その人（優れた智慧を有している人）にとっては、空性こそが最高の守護である。一方ここ（アビサマヤマンジャリー）では、全ての人たちを包摂するので（優れた人から劣った人までを対象とするから）、空性の観想の直後に守護のための「金剛」網などが説かれている。そして多くのアビサマヤにおいて、これ（アビサマヤマンジャリー）と同じ順序のものが見られるのである。

以上の記述から *Abhisamayamañjarī* の著者は、本稿で1番に分類した過程を、優れた智慧を有する人のための次第であると解釈し、2番に分類した過程を、全ての人を対象としている次第であると解釈している。このように、当文献の著者は順番の異なる2つの過程があることを認識した上で、*Lūyīpāda* の成就法とは異なる2番の過程を選び、先に「空性の観想」を設定していることが分かる¹²⁾。

六

4.3 内的観想

[3.12 十地と聖地の対応]、[3.13 身体マンダラ、女神と内の聖地の対応]とCSA [9] (a) (c) (d) (e) との比較である。サンヴァアラ系密教では、行

者の身体の外側にマンダラなどを観想することを「外的観想」といい、行者の身体の内側にマンダラを観想することを「内的観想」と呼ぶ。具体的には、行者の身体部位、例えば頭や心臓、臍などに尊格がいると観想する。そして、その身体部位が尊格そのものであると観想することによって、行者の身体自体がマンダラであると観想していく。これが当文献での内的観想である。また、内的観想で観想されたマンダラを「身体マンダラ」あるいは「内的マンダラ」と呼ぶ。この内的観想の次第について、CSAは聖地¹³⁾、身体部位、尊格、聖地のカテゴリーと十地との対応をそれぞれ個別に記している。一方、*Abhisamayamañjarī*では以下のように十地と聖地との対応は個別に記されず、1つのパラグラフにまとめられている。

[3.12] *pramuditāvimalāprabhākaryarciṣmatyabhimukhīsudurjayādūraṅgamācalāsādhumatīdharmameghākhyadaśabhūmiviśuddhyā krameṇa pīṭhopapīṭhādirūpaṃ kāyamaṇḍalam adhyātmayoginā bhāvayitavyam | (Sed: 17)*

歡喜、離垢、発光、焰慧、現前、難勝、遠行、善慧、不動、法雲という名の十地に対応する順番に、ピータ・ウパピータ¹⁴⁾などを本質とする身体マンダラが内的な〔実践を行う〕ヨーガ行者によって観想されるべきである。

このように、十地と聖地との対応が個別に記されていないことは、この対応関係が既に示すまでもない前提として広く知られていたからではないかと推察する。また、十地と、聖地の10のカテゴリーの対応については、外的マンダラの観想時点では示されておらず、内的マンダラの観想についての記述で初めて示される。この点は、*Abhisamayamañjarī*とCSAで共通している。このように、内的観想の際に初めて十地と聖地の10のカテゴリーとの対応が示されてることから、杉木(1997: 61)ではLūyīpādaは外的観想よりも内的観想を重視していたと考察されている。よって、*Abhisamayamañjarī*の著者も内的観想を重視していたということが分かる。

[3.13 身体マンダラ、女神と内の聖地の対応]では、聖地、身体部位、女

神、聖地のカテゴリーのそれぞれの対応関係が示されている¹⁵⁾。心輪、語輪、身輪に配置される合計 24 の女性尊格と 24 の身体部位との対応が、CSA [9] と同様に記されている。これに加えて、*Abhisamayamañjarī* [3.13.6] では大楽輪と三昧耶輪の女神たち 12 尊と 12 の身体部位との対応関係も示される¹⁶⁾。

5. 付論部分と関連する文献

先にも述べたとおり、付論部分に関しては CSA との類似点はほぼない。しかしながら、この付論部分は、CSA の註釈書を著した Prajñārakṣita の代表作、Balividhi, Bāhyapūjavidhi, Hastapūjavidhi という 3 つの著作と類似している点が多い。桜井先生の一連の先行研究¹⁷⁾によれば、この 3 つの著作は、CSA で説かれた尊格供養とバリ供養を、Lūyīpāda の流儀に従って実修できるよう、より詳細に解説した儀軌であることが分かっている。この 3 つの著作と類似しているということは、*Abhisamayamañjarī* の [4.1 バリ供養]、[5.2 パーフヤプージャー]、[5.3.1 ハスタプージャー] とその略作法の部分も、Lūyīpāda 流の儀軌から影響を受けていたと言えよう。また、Prajñārakṣita の著した CSA の註釈書である *Abhisamaya-nāma-pañjikā* (桜井 2005) は、CSA の註釈書という性質上 *Abhisamayamañjarī* と類似点が多い。なお、この *Abhisamaya-nāma-pañjikā* と上記 3 つの著作を合わせた 4 つの著作は「Prajñārakṣita の四法」と呼ばれている (桜井 1997a: 38-42)。

表 1. 「Prajñārakṣita の四法」と *Abhisamayamañjarī* の類似箇所

「Prajñārakṣita の四法」	<i>Abhisamayamañjarī</i> 該当部分
<i>Abhisamaya-nāma-pañjikā</i>	前半部分 (CSA と類似点の多い 1 帰敬偈～4 終結部)
<i>Balividhi</i>	4.1 バリ供養 (CSA [15])
<i>Bāhyapūjavidhi</i>	5.2 パーフヤプージャー
<i>Hastapūjavidhi</i>	5.3.1 ハスタプージャー 5.3.2 ハスタプージャーの略作法

6. おわりに

本稿では *Abhisamayamañjarī* と CSA の構成を比較し、主な類似点と相違点を確認した。蘊界処の浄化のように *Lūyīpāda* の CSA と類似している点もあれば、空性の観想と結界のように、著者が意図的に異なる順序をとっている部分もある。また、内的観想のように CSA の記述をまとめたと考えられる箇所や、CSA の記述に情報を書き加えたような部分があることが分かった。

以上のことから、*Abhisamayamañjarī* は *Lūyīpāda* 流の影響を強く受けて、発展した形であることが分かる。しかしながら、その著者の背景について不明な点も多いため、具体的な関係性については両著作の比較だけでは明確に提示できない。この点、*Lūyīpāda* の影響を受けている人物の 1 人である *Abhayākaragupta* と当文献との関連が深いことが分っているため、今後は *Abhayākaragupta* の著作を参照し、*Abhisamayamañjarī* の成立背景を模索したい。

資料: *Abhisamayamañjarī* のシノプシスと CSA との類似箇所

以下に *Abhisamayamañjarī* と *Cakrasaṃvarābhisamaya* (CSA, 桜井 1998) の構成と内容が、あるいはどちらか一方がほぼ一致する部分の対応関係を示す。

例: CSA [2] = CSA (桜井 1998) のパラグラフ 2

1 (3) = Sed の 1 ページ 3 行目

なお、CSA のパラグラフが全て *Abhisamayamañjarī* と対応関係にあるわけではないため、対応箇所のない部分は最下部に提示した。

<i>Abhisamayamañjarī</i>	CSA	Sed		
1 歸敬偈			3.2.2 補記	8 (13) -
1.1 歸敬偈	CSA [0]	1 (3) -	3.2.3 5輪マンダラの観想	8 (16) -
1.2 祈願文		1 (5) -	3.2.3.1 大衆輪の観想	CSA [7] (e) 9 (2) -
			3.2.3.2 3輪の観想, 24の女神と 外の24の聖地の対応	
2 準備			3.2.3.2.1 心輪の観想	CSA [7] (f) 9 (2) -
2.1 行者自身と周囲の浄化			3.2.3.2.2 語輪の観想	CSA [7] (g) 9 (5) -
2.1.1 言葉の浄化		1 (9) -	3.2.3.2.3 身輪の観想	CSA [7] (h) 9 (9) -
2.1.2 五蘊の浄化		1 (16) -	3.2.3.2.4 3輪の女神の尊容	CSA [7] 9 (13) -
2.1.3 バリマントラによる浄化		1 (19) -	(h, v.14-16)	
2.2 蘊界処の浄化			3.2.3.3 三昧耶輪の観想	CSA [7] (i) 9 (15)
2.2.1 蘊等への尊格の布置	CSA [2]	2 (7) -	3.3 文字布置	
2.2.2 諸処への尊格の布置	CSA [2]	2 (13) -	3.3.1 甲冑	CSA [11] (b) 10 (1) -
2.2.3 五界への尊格の布置	CSA [2]	3 (2) -	3.3.2 尊格の観想による文字布置	10 (5) -
2.3 男尊と女尊の尊容		3 (10) -	3.4 智輪の招入	CSA [11] (a), 10 (12) -
2.4.1 16人の女神による供養	CSA [4]	3 (12) -	三昧耶輪と智輪の合一	[12]
2.4.2 16人の女神の尊容	CSA [4]	3 (15) -	3.5 灌頂	CSA [14] 10 (17) -
2.5 ①賞賛偈②七種無上供養	CSA [4]	4 (7) -	3.6 甘露の享受	11 (7) -
③三歸依・依仏道・身供養・發菩提心			3.7.1 37尊マンダラを	CSA [18] 11 (18) -
2.6 ④四無量心の修習	CSA [1]	4 (10) -	維持できない場合	
2.7.1 智慧資糧の積集	CSA [5]	4 (14) -	3.7.2 空性の修習	CSA [18] 12 (4) -
2.7.2 空性の修習	CSA [5]	5 (1) -	3.8.1 疲れた場合①	12 (16) -
3 マンダラの観想			3.8.2 疲れた場合②	
3.1 マンダラ外輪の観想			3.8.3 疲れた場合③	
3.1.1 4つの要素と須弥山の観想	CSA [6] (a)	5 (5) -	3.9 マントラ	
3.1.2 結界			3.9.1 フリダヤ	CSA [13] 13 (6) -
3.1.2.1 金剛輪・金剛地・金剛網・ 金剛蓋・金剛の楯の観想	CSA [3] (a) (b)	5 (9) -	ウバフリダヤマントラ	
3.1.2.2 障害の除去	CSA [3] (c)	6 (1) -	3.9.2 8つの句のマントラ	13 (8) -
3.1.2.3 結界の完成		6 (12) -	3.9.3.1 花環マントラ	13 (15) -
3.1.3 楼閣宮殿の観想	CSA [6] (b), [7] (a)	6 (17) -	3.9.3.2 花環マントラの能力	14 (11) -
3.1.4 五相現等覚		7 (3) -	3.9.4 36の女神のマントラ	
3.2 37尊マンダラ			3.9.4.1 大衆輪の女神	CSA [13] 15 (1) -
3.2.1 Vajravārahi の観想	CSA [7] (c) (d)	7 (10) -	3.9.4.2 32の女神のマントラ	CSA [13] 15 (3) -
			3.9.4.2.1 心輪の女神	CSA [13] 15 (3) -
			3.9.4.2.2 語輪の女神	CSA [13] 15 (6) -

3.9.4.2.3 身輪の女神	CSA [13]	15 (9) -			
3.9.4.2.4 三昧耶輪の女神	CSA [13]	15 (12) -			
3.9.5 補記		15 (15) -			
3.10 別種類のマンダラ		15 (16) -			
3.10.1 <i>Vajrāvālī</i> のマンダラ①		15 (17) -			
3.10.2 <i>Vajrāvālī</i> のマンダラ②		15 (19) -			
3.11 三十七菩提分法と女神の対応	CSA [8]	16 (5) -			
3.11.1 四念処	CSA [8]	16 (7) -			
3.11.2 四神足	CSA [8]	16 (10) -			
3.11.3 五根	CSA [8]	16 (13) -			
3.11.4 五力	CSA [8]	16 (18) -			
3.11.5 七覚支	CSA [8]	17 (1) -			
3.11.6 八正道	CSA [8]	17 (5) -			
3.11.7 四正断	CSA [8]	17 (10) -			
3.12 十地と聖地の対応	CSA [9]	17 (14) -			
	(a) (c) (d) (e)				
3.13 身体マンダラ,					
女神と内の聖地の対応					
3.13.1 24 聖地の種字	CSA [9] (b)	18 (1) -			
3.13.2 心輪の女神と聖地と	CSA [9] (c)	18 (2) -			
身体部位の対応					
3.13.3 語輪の女神と聖地と	CSA [9] (d)	18 (7) -			
身体部位の対応					
3.13.4 身輪の女神と聖地と	CSA [9] (e)	18 (12) -			
身体部位の対応					
3.13.5 身体マンダラに関する説示		18 (17) -			
3.13.6 三昧耶輪と大楽輪の		19 (3) -			
女神と身体部位の対応					
			4 終結部		
			4.1 ハリ供養	CSA [15]	19 (7) -
			4.2 尊格の帰還		20 (16) -
			5 付論		
			5.1 尊格としての過ごし方		
			5.1.1 沐浴時・食事時		20 (20) -
			5.1.2 正午時	CSA [10] (v.21)	21 (6) -
			5.2 パーフヤプージャー		21 (15) -
			5.3.1 ハスタプージャー		22 (14) -
			5.3.2 ハスタプージャーの略作法		23 (12) -
			5.4 ホーマ		24 (6) -
			5.5 中位の長さの儀礼		24 (13) -
			5.6 略儀礼		24 (18) -
			5.7 別バージョンの <i>Vajravārāhī</i> 成儀法		25 (3) -
			5.7.1 赤い <i>Vajraghoṇā</i>		25 (4) -
			5.7.2 白い <i>Vajraghoṇā</i>		25 (16) -
			5.7.3 赤色の女神		26 (14) -
			5.7.4 赤色 <i>Vajrayoginī</i>		27 (6) -
			5.7.5 3 体の <i>Vajrayoginī</i>		27 (15) -
			5.7.6 半跏座の <i>Vajravārāhī</i>		28 (11) -
			5.7.7 <i>Vidyādhari Vajrayoginī</i>		29 (11) -
			5.8 まとめ		30 (6) -
			5.9 廻向偈		30 (8) -

* *Abhisamayamañjarī* と対応する箇所がない CSA のパラグラフ

CSA [7] (b) 八尸林に関する説明

CSA [16] 男性尊格と身体の体液・組織との対応

CSA [17] 装飾が意味するものなどの説明

CSA [19] 補足説明

CSA [20] 行者の死に際する説示

(上記 CSA のパラグラフ説明は、筆者が便宜上記したものである。)

参考文献

一次文献

Abhisamayamañjarī

Ms K = Kaiser Library. 所蔵 KL Acc.No.117 (=NGMPP Reel No.C13/5) .

Ms B = Bodleian Library. 所蔵 Shelfmark MS.sansk.C.16 (R) .

Sed = *Abhisamayamañjarī of Śubhākaragupta*. S. RINPOCHE and V. DWIVEDI (eds.) *Abhisamayamañjarī of Śubhākaragupta*, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies,1993 (Rare Buddhist Text Series 11)

Bāhyapūjāvidhi Prajñāraṅgita : 桜井 (2002b)

Cakrasaṃvarābhisamaya (CSA) Lūyīpāda : 桜井 (1998)

Cakrasaṃvarābhisamayapañjikā Prajñāraṅgita : 桜井 (2005ab)

二次文献

ENGLISH, Elizabeth. 2002. *Vajrayoginī : Her Visualization, Rituals, and Forms (Studies in Indian and Tibetan Buddhism)* , Boston:Wisdom Publications.

ISAACSON, Harunaga & Francesco Sferra (eds.) 2014. *The Sekanirdeśa of Maitreyanātha (Advayavajra) with the Sekanirdeśapañjikā of Rāmapāla : Critical Edition of the Sanskrit and Tibetan Texts with English Translation and Reproduction of the MSS*, Manuscripta Buddhica 2 (Serie Orientale Roma vol. CV II) , Naples: Università degli Studi di Napoli "L'Orientale".

桜井宗信 1997a 「Cakrasaṃvarābhisamaya 研究 (1) —原典資料と註釈書の書誌研究—」『密教学研究』29:31-52.

——— 1997b 「Cakrasaṃvarābhisamaya 研究 (2) —訳註 I —」『密教図像』16: 1-16.

——— 1998 「Cakrasaṃvarābhisamaya の原典研究—梵文校訂テキスト—」『智山学報』49: (1) - (32) .

———2002a 「Prajñāraṅgita の説く bāhyapūjā」『印度学仏教学研究』50 (2):

(192) - (196) .

- 2002b 「*Bāhyapūjāvidhi* の原典研究」『智山学報』65: (31) - (39) .
- 2005a 「Prajñārakṣita 『Cakrasaṃvarābhisamaya 註』の原典研究—
梵文校訂テキストⅠ—」『頼富本宏博士還暦記念論文集 マンダラの諸
相と文化 上—金剛界の巻』法蔵館: 85-100.
- 2005b 「Prajñārakṣita 『Cakrasaṃvarābhisamaya 註』の原典研究—
梵文校訂テキストⅡ—」『智山学報』54: (161) - (185) .
- 2011 「Kambalapāda (La ba la) の『チャクラサンヴァラ成就法』—
その構成と観想法—」『密教図像』30: 1-18.
- ジュゼッペ・トゥッチ著, ロルフ・ギーブル訳. 1984 『マンダラの理論と
実践』平河出版社.
- 杉木恒彦 1997 「サンヴァラ系密教諸流派の生起次第」『東京大学宗教学年報』
14: 59-79.
- 2007 『サンヴァラ系密教の諸相—行者・聖地・身体・時間・死生』
東信堂.
- 田中公明 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社.
- 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編 1989 『梵語仏典の研究Ⅳ 密教經典篇』
平楽寺書店.
- 松本恒爾 2019 「ハタヨーガ批判について」『密教学研究』51: 101-116.

註

- 1) ・本稿で提示する *Abhisamayamañjarī* のサンスクリットテキストは S. RINPOCHE と V. DWIVEDI による校訂本 (以下 Sed) を底本としている.
- ・Ms.K と Ms.B, Ms.B を元に作成された ENGLISH (2002) の校訂文を参照し, 異読を提示した.
- ・チベット訳の参照はしていない.
- ・異読註の採用した読みの前には “・” を, 後には区切り記号 “]” をつけ, 区切り記号の後には採用した読みを支持する文献や写本の略号を記す. その後セミコロンで区切り, 異読を示した.

- ・ 試訳は筆者によるものであり、() では語句の言い換えを、[] では文脈上の補足説明を提示している。
- 2) Heruka には形態と名称がいくつかあり、それぞれの場合で配偶女神が異なる。これらの形態と名称は Vajravārāhī を明妃とする場合の Heruka である。例えば①一面四臂の Hevajra, ②一面二臂の Saṃvara, ③四面十二臂の Saṃvara, ④三面六臂の Saptākṣara の明妃とされる。(トゥッチ 1984: 135)
- 3) [3.2.1 Vajravārāhī の観想], [3.10.2 Vajrāvalī のマンダラ②], [5.7.1 赤い Vajraghoṇā] における尊容。資料 *Abhisamayamañjarī* シノプシスを参照。Cf. ENGLISH (2002: 50-107)
- 4) *vistarataḥ saptatṛiṃśadātmakaṃ bhagavatya* maṇḍalacakraṃ tatraiva maṇḍalabhedānantaraṃ vajrāvalyām asmadgurubhir upadarśitaṃ likhyate* | (Sed: 15)
 - ・ *bhagavatya*] K, B, ENGLISH; *devībhagavatya* Sed
 37 からなる女神の集団 (マンダラを構成する尊格の集団) がおり、その同じ場所に、マンダラ [を構成する尊格] を分割した (それぞれの尊格をそれぞれの区画に配置した) 直後に、『ヴァジュラーヴァリー』において私たちのグルによって詳しく説かれたものが描かれる。
- 5) 本文に引用されている Abhayākara Gupta の著した *Vajrāvalī* の成立年代がおおよそ 12 世紀前半である。また、塚本他 (1989: 285) では GSS の編纂された年代が 12 世紀後半～14 世紀の間と推定されている。さらに、GSS の写本のうち最古のものと考えられている、オックスフォード大学のボドリアン図書館所蔵の写本の書写年代は 14 世紀とみなされると記されている。以上の点から、14 世紀までには *Abhisamayamañjarī* も成立していたと考えられる。
- 6) *eṣu ca krameṣu kramam ekam ādāya śraddhādayāvān niḥsaṅgaḥ samayasevī nirvicikitsaṃ* bhāvayan niyamena sādhayati* | (Sed: 28)
 - ・ *nirvicikitsaṃ*] Sed; *nirvicikitso* ENGLISH
- 7) *Abhisamayamañjarī* [5.9 廻向偈] には題目を含む偈がある。
vidhāyedaṃ viśvaṃ guṇakusumasammodasubhagaṃ samihante

bhoktuṃ yadi jhaṭīti santaḥ śamaphalam |
 tadopeyur yatnād abhisamayakalpadrumbhavāṃ navām unmīlantīm
 atirasavatīṃ mañjarīm imām || (Sed: 30)

もしも人々がこのすべてを実行し、一瞬のうちに、徳目という花の香りのする美しい寂静（涅槃）という結果を享受することを望むならば、アビサマヤ（現観）という如来樹から生じ、花開き、非常に「優れた」エッセンスを有する、新鮮なこの花房を（mañjarim）努めて得るべきである。

- 8) *Yoginisaṃcāraṇtantra* は蘊→処→界、*Abhidhānottaratantra* は界→蘊→処の順である（田中 2010: 367）。
- 9) *Guhyasamāja* 流儀の文献には、どちらの過程をとるものもあるようだ。
- 10) 桜井（1997a: 33）では *Advayavajra* も独立した流派を形成したと見做している。Cf. 杉木（1997: 71）は *Bu ston* に伝えられた系譜にみられる流派として *Atīsa* 流も挙げている。
- 11) 「以上のこと」とは [2.7.1 智慧資糧の積集] から [3.2.1 *Vajravārāhī* の観想] の過程である。
- 12) この「空性の観想」と「結界」の順序の違いは、*Hevajratantra* において整理された、いわゆる四歓喜の順序に関する2種類の解釈からの影響を受けた実践形態にもみられる、というご指摘を種村隆元先生よりいただいた。2種類の解釈とは以下のとおりである（Cf. 松本 2019）。

解釈 A: ānanda → paramānanda → sahañānanda → viramānanda

解釈 B: ānanda → paramānanda → viramānanda → sahañānanda

この点、当文献の著者の師匠である可能性がある *Abhayākara*gupta は解釈 B の立場をとっている（ISAACSON & SFERRA 2014: 97）。そして、解釈 B はその実践形態で「空性の観想」→「結界」の順をとるといふ。これを考慮すれば、当文献の形態が2番の過程をとるのは *Abhayākara*gupta の教理を受け継いだ結果とも考えられる。しかし、この四歓喜の順序に関する解釈の影響が、サンヴァラ系密教にどの程度の影響を及ぼしているかについては定かではなく、今後、以上のような教理の違いが実践形態に与えた影響を踏まえて考察する必要がある。

- 13) 聖地の伝承には様々あるが、杉木（2007: 87）によると、個々の聖地

群の起源と構造という観点から4つの分類に分けられるという。この分類方法を参照すると、*Abhisamayamañjari* と CSA はともに第1型伝承に属している。

- 14) ピータとウパピータは聖地のカテゴリーの一例である。
- 15) 内的マンダラ理論については杉木氏によって、その形態と意義という観点から5つの型に類型化されている(杉木 2007: 137)。このうち、第2型内的マンダラに CSA が含まれ(杉木 2007: 142)、第4型内的マンダラに *Abhisamayamañjari* が含まれている(杉木 2007: 155-156)。第4型内的マンダラには、Prajñārakṣita 作 *Abhisamayapañjikā*, Abhayākara Gupta 作 *Cakrasaṃvarābhisamaya* も含まれている。そして杉木(2007: 155)では、この第4型内的マンダラを、Lūyīpāda 流伝承の1つの発展型であり、ヴィクラマシーラ僧院内における権威的な内的マンダラ理論の1つと見なしている。
- 16) 37尊全ての身体内化を試みるものであり、註15で示した第4型内的マンダラの特徴でもある(杉木 2007: 159)。なお、*Abhisamayamañjari* では、主尊 Vajravārāhi と対応する聖地や聖地のカテゴリー、身体部位は説かれない。
- 17) 桜井(1997a, 2002ab)など。Cf. ENGLISH (2002: 218, 344) に Hastapūjā の詳細がまとめられている。